

実践報告

地域と連携した総合型地域スポーツクラブにおける
学生参画型プログラムの取り組み
— ちびっこアジリティ教室を例として —

高村 秀史

日本福祉大学 全学教育センター

University and Community Cooperation in Student Program
at a Community Sports Club
- Using Children Agility Classroom as a Model -

Shushi TAKAMURA

Learning Advisor, University Educational Center, Nihon Fukushi University

Keywords : 総合型地域スポーツクラブ, 地域連携, スポーツ振興, アジリティ, 幼児教育

要旨

2012年9月に、日本福祉大学(以下本学)と大学所在地である美浜町との連携による総合型地域スポーツクラブ「みはまスポーツクラブ」(Mihama Sports Club: 以下MSC)が開設された。MSC開設時には複数のプログラムが準備された。本稿はその中から、学生が参画できるプログラムとして立案された「ちびっこアジリティ教室」での実践から得られた知見について考察を行なう。プログラムの立案にあたって、学生の参画は大学と地域双方に利益が生じることが必要と考えられた。大学側では「学生と地域とのふれあい」「学生の学びを深める」ことが利益となった。具体的には、ボランティアの場の提供、指導計画の立案や指導実践等の学生の能力向上などである。地域には、美浜町にはない4歳から6歳までの未就学児童が運動する場の提供が利益となった。実践の結果、「ちびっこアジリティ教室」は地域から友好的に受け入

れられた。学生も実践から得られた経験と知識、ボランティアに対する責任感の派生等得るものが多いことが示唆された。2013年後期も実践は続けられている。本稿では、2012年度後期と2013年度前期の開催を中心に、プログラムの立案経緯や実践の報告を行なう。

はじめに

1. 背景

本学に所属する学生は、学部を問わずボランティア活動に積極的に参加する傾向が見られる。ボランティア活動の窓口は多様である。学生個人やサークル単位で行なっているものを始め、2011年には災害ボランティアセンターが発足されている。同センターでは、長期休業期間や週末などを利用して2013年現在も継続的に被災地支援に取り組んでいる。

ボランティアの対象は災害支援だけに限らず、学童保

育、特別支援学校、小中学校などの教育機関、老人介護施設などの福祉施設、行政など多岐にわたっている。ふくしに関わる広い分野に学生が興味を持ち、ボランティアに参加することは「万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を」をミッションとし、広い意味での「ふくし」を学ぶ本学の特徴ともいえる。

本学学生のボランティアは分野、地域等広範囲にわたって行なわれている。しかしボランティアを行なっている学生に対するヒアリングから、大学所在地である美浜町においては、ボランティアがあまり行なわれていない実態が明らかになった。また、ボランティアは無償の慈善活動であることを理解しつつも、ボランティアを行なうことで各自の将来に役立つ学びを得たいと考えている学生が多く存在することが明らかとなった。

そこで本学と美浜町が協働で企画、運営を行なっている総合型地域スポーツクラブの「みはまスポーツクラブ」(以下 MSC : Mihama Sports Club) において、地域で学生が参画できるボランティアの場を提供し、ボランティアを通して学びを得ることができるプログラムとして「ちびっこアジリティ教室」を立案し、MSC 開設前に行なわれたプレ事業においてプログラムの効果や運営方法などの検証を行なった(高村・松井・伊藤, 2012)。

本報告では2012年9月の開設以降に行なわれたプログラムの実践から得られた知見の報告とともに、学生と地域が交流しながら学ぶことの意義について考察を行なっていきたい。

2. 総合型地域スポーツクラブの推進

文部科学省は、スポーツ振興法に基づき、目指すべきスポーツ振興の基本的な方向性を打ち出すことを目的とし、2000年9月に「スポーツ振興基本計画」を策定した。この計画策定から5年が経過したことに伴い、2006年に中央教育審議会スポーツ、青少年分科会の意見を踏まえて計画の改訂が行なわれた(文部科学省 2006)。

スポーツ振興基本計画では、生涯スポーツ社会の実現に向けた、地域におけるスポーツ環境の整備充実方策として、「国民のだれもが、それぞれの体力や年齢、技術、興味、目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現する」ことを目標としている。具体的な目標として、成人の週1回以上のスポーツ実施率を50パーセントとすることが示されている。この考え方は、2011年に法律

が全改正され、「スポーツ基本法」となり、「スポーツ基本計画」となっても踏襲された。

目標達成のための基本方針として「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができるスポーツ環境を整備すること」が謳われている。スポーツ環境整備の重要な施策として「総合型地域スポーツクラブの育成、推進」が推進されている。

3. みはまスポーツクラブ (MSC) について

本実践で学生が参画している「ちびっこアジリティ教室」は MSC で開催されている。

2008年に本学にスポーツ教育センターが設置された。設置と同時期にセンターのミッションの一つとして、大学を基盤とした総合型地域スポーツクラブの検討が開始された(日本福祉大学スポーツ教育センター HP)。2009年には、大学のクラブ検討の動きを知った美浜町体育指導委員(2012年にスポーツ推進委員に名称変更)、ならびに町職員が加わる形で総合型地域スポーツクラブの設立の検討が始まった。2010年7月に設立準備委員会が正式に発足し、美浜町と本学が連携してクラブを設立することが確認された。その後、美浜町のスポーツ関連既存団体との調整と連携、町民のスポーツに対する意識調査などが行なわれ、プログラムの検討が進められた。

MSC は地域住民の健康維持、増進のために設立された組織である。営利団体ではなく2012年の開設以降、2013年現在まで年会費の徴収を行っていない。運営は教室への参加費と大学、町からの出資で行なわれている。このため、プログラムの指導は大学教職員、スポーツ推進委員のボランティアを中心に行なわれている。本実践のちびっこアジリティ教室も、大学教職員の指導のもとボランティアの学生で運営することを前提として計画された。プログラムは2012年春季プレ事業として試行され、その後の本開催においても継続して行なわれている(高村・松井・伊藤, 2012)。

学生参加プログラムの立案と意義

1. 美浜町における子どものスポーツ環境

プログラムを計画する前に、本実践の内容が必要とされているかを検討する必要があった。スポーツ教育センターは、2009年度に町民のスポーツ意識調査を行ない、地域のニーズを調査した(日本福祉大学スポーツ教育セ

ンター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係, 2010). 調査において未就学児童はアンケート項目に入っていなかった。そこで、美浜町における未就学児童のスポーツ環境を知るため、2011年度に行なわれたプレ事業のミニテニス教室・ラクロス教室・よさこい教室において口頭や書面によるアンケートで実態調査を行なった。対象は、未就学児および小学校低学年の保護者である。回答は延べ30名から得られた。主に口頭と自由記述より、美浜町には子どもの基礎的な運動能力を養成する教室が存在しないことが明らかとなった。「子どもにスポーツをさせたい」と考える保護者は近隣の半田市や武豊町まで通っていた。中には名古屋市まで通っている子どももいるという情報も得た。

昨今、子どもの「運動不足」や「運動音痴」、肥満解消のための運動教室や、体育の家庭教師等が全国で展開されている(スポーツ健康産業団体連合会, 2008)。しかし、美浜町では就学前や小学校低学年児童にスポーツを行なわせる環境が十分ではなく、環境を整え提供する必要性が示唆された。

2. 学生のボランティアニーズ

本学においてボランティア活動に参加している学生30名を対象に、ヒアリングによる調査を行なった。

活動場所は名古屋市内19名、被災地5名、学校所在地である美浜町を除いた知多半島内が9名であった(重複を含む)。大学所在地である美浜町では2名であった(重複者なし)。活動場所を見つける手段としては、インターネット、先輩からの口コミ、新聞、学内の情報掲示板などであった。ボランティアを行なう理由に関しては、全員が「困っている人の役に立ちたい」「知らない誰かのために役に立ちたい」と慈善活動を行なうこと自体に意義を感じていることがわかった。加えて、「ボランティアを行なうことで各自の将来に役立つ学びを得たい、得られると思う」と考えている学生が多く存在することが明らかとなった。

本学の学生は下宿生の割合が多く、大学所在地の美浜町にボランティアを行なう場所を作るとは、よりボランティアを身近なものにし、関わりやすくすることができると推察された。また、将来教員や保育士を目指す学生も多い。教職員の指導を受けながら子どもを対象にボランティアを行なうことは、学生のキャリア形成にも役立つことが推察された。

3. 期待される学生の学び

プログラム運営に参加する学生は、ボランティア参加が基本である。ただし交通費等の必要最低限の経費は得られるよう配慮している。いわゆるアルバイトのような収入は得られない。学生にとって、本実践に参加することによる最大の成果は学びである。参加の場面で学生は、子どもの指導を行ない交流する場を提供される。指導の場面では指導の方法や、難しさ・喜びなどを実体験として学ぶことができる(竹田, 2009)。また、交流の場面においても、今後の進路に活かすことのできるコミュニケーション力を磨くことができる。こうした学びが学生の継続的な行動のインセンティブとなる。

学生の参加は未公認、スポーツ系の違いはあるがサークル単位で行なわれる場合が多い。ちびっこアジリティ教室に参加する子どもや保護者にとって、学生は個人ではなく「日本福祉大学のお兄さんお姉さん」であり、「アメフト部のお兄さん」「～サークルのお姉さん」として捉えられる。学生スポーツ全般的に言えることだが、一部を除いて観客や運営に苦勞している場合が多い。地域ボランティアに参加することで認知度が上がり、ファンが増加することはモチベーションの向上や試合への観客動員などにつながることも期待できる。このようにプログラムに参加することで学生が受ける恩恵は大きく、多様である。以上のことから、学生に学びの場を提供できるプログラムを構築することは重要であると考えられる。

プレ事業の段階では、準備されたメニューを行なう参加にとどまっていたが、学生が主体的かつ継続的にスポーツクラブに参画することでさらに深い学びやメリットを享受することになると推察される。

4. アジリティ(敏捷性)向上を狙いとす根拠

スカモン(Scammon)の発育曲線によれば、神経系の発達は幼児期に顕著であり、およそ6歳ごろまでに成人のほぼ90%に達すると言われている(中野, 2001)。したがって、神経系が関与する運動能力を未就学の時期に鍛えることが重要となる。例えば、文部科学省は3・4歳で「体のバランスをとる動き」と「体を移動する動き」を身につけさせ、4・5歳でさらに「用具などを操作する動き」を加え、5・6歳でこれら3つの動きを洗練化する、という流れを示し、その具体的な方法を幼児期運動指針ガイドブックで例示している(文部科学省

幼児期運動指針策定委員会, 2012)。そこで、これら3つの動きの洗練化を図るため、アジリティ向上を目的としたプログラムの必要性を感じた。対象はプログラム立案時点で地域に運動能力向上に関する教室がなく、神経系の発達に最も有効と思われる4・5歳の未就学児を対象とした。該当年齢の子どもにアジリティトレーニングを行なうことは、子ども達が将来出会うであろう様々なスポーツに対応する基礎となる運動能力を高めることにつながる。

本学ではスピード&アジリティ&クイックネストレーニング(SAQトレーニング)や動作を構成する基本的動作を学ぶムーブメントトレーニングに取り組んでいるスポーツサークルが少数ながら存在することも理由の一つである。指導を行なう学生からみた場合、普段から行なっているトレーニングを子どもに指導することで、自らの理解度を高められることが期待できる。また、基礎的な運動能力を持った子どもが将来、町の既存スポーツ団体に所属していくことは、地域のスポーツ振興にも貢献できる。

ちびっこアジリティ教室の概要

1. 日程及び対象児童

ちびっこアジリティ教室は、2012年度プレ事業より開始された。プレ事業は地域のニーズや学生の役割などを確認するため「ちびっこアジリティ体験」として試験的に1回のみで開催とした。その後教室として2013年度前期までに合計3期実施した。今後も継続予定である。2012年後期からの教室はすべて5回で1期とし、2012年度後期は月に1度、2013年度前期は2週間に1度の割合で実施された。参加対象者は美浜町とその周辺地域に在住する4・5歳の未就学児童とし、募集定員はプレ事業が15名、MSC設立後は2012年後期が15名、経験を積んだ2013年前期が20名であった。受付は先着順とした。毎回告知後すぐに定員が埋まってしまう状況があり、保護者からも定員を増やしてほしいという要請があったが、学生の経験値や、ボランティアであることを考慮し、少数での開催を行なっている。

参加費は1期5回開催で1,000円である。この中には保険代が含まれており、学生の交通費等を差し引くと収益はほとんどない。

広報活動は美浜町HPやスポーツ教育センターのwebサイト、facebookなどのweb利用や、美浜町の広

報誌である「広報みはま」や、チラシなどの紙媒体を利用した。また、会員に対するメーリングリストを作成し、情報を公開した。

2. 体制

ちびっこアジリティ教室は、教員1名と学生のリーダー的存在となる指導スタッフ1~3名、補助スタッフリーダー・補助スタッフ5~10名程度(学生ボランティア)、事務局スタッフ1~3名(美浜町教育委員会、スポーツ推進委員、本学職員)で運営している。教員は教室の基本的なプログラムの立案や学生の指導などを行ない、教室全体を統括した。指導スタッフには将来保育士を目指し、実習等の経験を積んだ子ども発達学部の学生や、ボランティアサークルの責任者等を任命し、教員の指導を受けながら、プログラムの意図に沿った具体的な動き等を立案させた。その他の学生ボランティアは経験により、補助スタッフリーダー、補助スタッフと役割を分けた。補助スタッフはボランティア経験値の浅い学生やボランティア初参加の1年生、体験的に参加する学生などが中心であった。難しい指導はあまり求めず、楽しむことをベースに、指導する動きの把握と、安全に対する配慮を指導し参加させた。事務局スタッフは、受付時の対応を中心に参加した。内容は出席の確認、参加費の徴収、写真等の記録、体重計測等を行なった。

3. 内容

ちびっこアジリティ教室は4・5歳の未就学児童のアジリティ(敏捷性)能力を養成することを目的としているが、加えて保護者にもアジリティに対する基本的な知識や、家庭で楽しく遊びながら取り組むことができるアジリティトレーニングの知識を得てもらうことを目標とした。保護者には種目説明等を書いた資料を配布し、教員が解説を行なった。運動能力には、身体を巧みに使う能力である巧緻性、俊敏に体を移動する敏捷性、バランスをとりながら身体をコントロールする平衡性、手足と目の協応性などがある。これらは本来、運動要素を持った遊びの中にある、多様な運動パターンを体験しながら、楽しく遊びながら自然に発達していくものである。しかし、近年子ども達は運動要素のある遊びよりも、ゲームやテレビなどの静的な遊びの占める割合が増加していると言われている(吉田ら, 2002)。本実践では、「走る」「跳ぶ」「投げる・捕る」「回転する」「判断して動く」の

表1 ちびっこアジリティ教室日程および受講児童状況

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	参加者	男女比	年齢
2012年 プレ事業 18:00~19:00	6/27 水					16	男 11 女 5	4歳7名 5歳9名
2012年 後期 18:00~19:00	10/17 水	11/14 水	12/6 木	1/16 水	2/20 水	21	男 15 女 6	4歳12名 5歳9名
2013年 前期 18:30~19:30	5/15 水	5/29 水	6/19 水	7/10 水	7/24 水	21	男 13 女 8	4歳8名 5歳13名

5つの動きを軸として、いろいろな動きを楽しく体験できるように種目を考えた。1時間という時間制限があるため、1回の教室では4種目を選択し設定した。5回の教室でいろいろな動きを体験するため、毎時間種目の構成は変更した。教室は、子どもを年齢や体格により4グループに分けた。補助スタッフリーダーが引率しながら、設定した4種目を10分程度ずつ行なった。1時間で4種類の異なった運動パターンを体験できるようにプログラムした。プログラム例を資料1に示す。

4. 学生スタッフの指導, 育成

教室は、学生ボランティアによる指導やサポートを中心に行なわれた。理想的なスポーツ環境の提供や地域との交流を行なうためには、運営スタッフである学生が果たす役割が大きい。子どもの運動指導経験の少ない学生が、いかに体験し、学びを深めていくかが重要な課題である。そこで学生に対する指導も段階ごとに変化させていくことを考えた。まず、学生を経験値や知識等で「指導スタッフ」「補助スタッフリーダー」「補助スタッフ」

に分けた。指導スタッフは実習等で指導案の立案や子どもに対する経験値があり、プログラムの具体的な内容の立案等に携わらせた。その他にも補助スタッフへの指導、助言を行なわせ、責任を持たせることでより深い学びと経験を積めるよう促した。補助スタッフリーダーは、本実践を含む子どもの指導経験があるもので、補助スタッフの指導を始め、各種目の指導責任や班の引率などを行なう。補助スタッフは、ボランティア経験や子どもに接する機会等の経験値が浅いものである。補助スタッフは最低限守るべき内容を指導し、理解、順守することを参加の条件とした。学生ボランティアに対して事前に配布した心得を表2に示す。それ以外はまず自らが楽しんだうえで「責任」「知識」などを学びながら経験を重ねていけるよう促した。各回の教室の開催前には指導の注意点やプログラム詳細について指導を行なった。

教室終了後には振り返り学習を行なった。振り返り学習では、保護者からのアンケート結果や、担当教員の感想や指導、事例をもとに、学生と教員でディスカッションを行なった。

表2 学生ボランティアに対し配布した事前指導 (心得)

-
- ・日本福祉大学の代表であることを理解し、プライドを持って行動しましょう
 - ・保護者・運営スタッフ・体験児童を問わず、あいさつ等礼儀をしっかりとる
 - ・子どもの理解=君たちの理解ではない。できるだけやさしく、簡潔な表現方法をしよう
 - ・参加児童の目線(しゃがんで)話をしよう
 - ・見本動作は大きく、表現をオーバーにおこなおう
 - ・体験児童がうまくできた時のほめ言葉は、即座に大きな表現でかけよう
 - ・スタッフ同士固まらず、参加児童の全面・側面・背面に分かれ安全を見守ろう
 - ・「楽しい・不安・悔しい・うれしい」参加児童の表情に注意しよう
 - ・一人ぼっちの子どもを作らないように気を配ろう
 - ・学生スタッフ同士、気がついたことを空き時間等にコメントしあいましょう
-

実践結果の検討

1. 参加学生の感想

補助スタッフの中には、1日で来なくなってしまったものも若干名いたが、多くはやりがいを感じ、その後も継続してボランティアに参加してくれる学生が多かった。本実践に参加した「補助スタッフリーダー」「補助スタッフ」に感想を自由記述にて回答させた。以下に抜粋する。

Q「参加した感想を教えてください」

- ・子ども達に名前を覚えてもらうことで、もっとちゃんと教えられるようになりたいと思うようになった。
- ・楽しかったです！！
- ・知らないことや初めて経験したことがたくさんあった。
- ・ちょっとした言い方の工夫で子どもができるようになったりして嬉しかったです。
- ・保護者の人の目が気になって緊張しまくった。
- ・いろんなことにコツがあって、先生やリーダーに教えてもらえたのが良かった。
- ・私はまだ名前とか覚えてもらえないんだけどリーダーとかは覚えてもらえたり、名前前で呼んでもらってた。けっこううらやましかった。
- ・子どもが言うことを聞いてくれない(泣)。
- ・下の学年の子に指導するのは難しかったけどやりがいがあった。
- ・また参加します。

2. 参加児童と保護者の感想

教室終了後、参加した児童の保護者に対してアンケートや口頭質問を行ない、延べ33名から回答を得た。ブレ事業をのぞく2期のアンケートの結果を表3に示す。

以下は自由記述による感想である。

Q「学生の指導を見て感想を教えてください」自由記述、抜粋

《2012 後期》

- ・フレンドリーに対応して下さってとても良いと思う反面、安全面では少し不安だった。見てはくれているが、見ているだけで、子どもがぶつかったり言う事を聞かなかったりした時はもう少し子どもに注意しても良いと思う。
- ・学生さんの言う事を聞かない子がいて、学生さんも困っていた。親が子どもを見なければだめだと思う。ちゃんとやる子が困っている。
- ・子どもに合わせてやさしく指導してもらえた。もう少し

表3 参加児童に対するアンケートの結果

Q「教室の内容について」

	2012 後期	2013 前期	合計
とても楽しかった	7	15	22
まあまあ楽しかった	5	0	5
どちらとも言えない	2	0	2
少しつまらなかった	1	0	1
とてもつまらなかった	0	0	0

Q「指導者(学生)の説明について」

	2012 後期	2013 前期	合計
とてもわかりやすかった	2	7	9
まあまあわかりやすかった	6	7	13
どちらとも言えない	4	1	5
少しわかりにくかった	0	0	0
とてもわかりにくかった	0	0	0

Q「安全面についての配慮は十分でしたか？」

	2012 後期	2013 前期	合計
とても安全だった	7	9	15
まあまあ安全だった	3	6	9
どちらとも言えない	2	0	3
少し危なかった	0	0	0
とても危なかった	1	0	1

Q「指導者(学生)の指導全般について」

	2012 後期	2013 前期	合計
とても満足だった	3	8	11
まあまあ満足だった	8	6	14
どちらとも言えない	2	1	3
少し不満だった	0	0	0
とても不満だった	0	0	0

し元気よくお願いします。

- ・最初の見本だけでなく、学生も列に並んで見本を示すと分かりやすいと思った。
- ・子どもに遠慮があるように見られました。もっとぐいぐい入ってきてOK だと思う。

《2013 前期》

- ・子どもが楽しんでスポーツに取りくめてとてもよかったです。
- ・一人ずつとても丁寧にかかわってくださった。
- ・ダメなことはダメ！！と怒ってほしい。

- ・みんな優しくて頼もしかったです。
- ・学生の方がすごく子どもたちに接してくれたことにとっても感謝しています。ありがとうございました。
- ・とても親切に、楽しくできるように心掛けて下さっているのがわかりました。
- ・あいさつをきちんとしてくれ好印象でした。時間外でも子どもと接してくれたり、体全体を使って子どもとの距離を縮めようと積極的に動いてくれたりする姿勢が見られました。全体・個別ともに学生さんならではの若さあふれる指導がいいなと思いました。
- ・毎回とても楽しみにしているようでした。スタッフも多く、たくさん声を掛けてくれたことで、うれしくてがんばっているようで、こちらも安心して見ていました。

Q 「教室全体の感想を教えてください」自由記述, 抜粋《2012 後期》

- ・子どもはとても楽しそうでした。
- ・毎月1回ではなくもう少し行なえると嬉しいです。
- ・楽しく参加できているようなのでよかった。
- ・子どもがとても楽しく運動できてよかったです。
- ・万歩計を受付で渡されたが、説明がなくて使わなかった。大人も運動できてよかった。
- ・見学の小さな子どもが参加していた。学生さんの言うことも聞かず困りました。しっかりやりたい子がちゃんとやれる環境でなければとても危険です。時間内で目についた子の親にちゃんとみてもらえるように協力をお願いします。
- ・教室の内容はよいと思いますが、ふざけている子が多すぎるのが気になる(そのうち怪我をするような気もする)。女の子はそれを見て待っていたり困っている。どうしてアスミルススポーツクラブの様にしっかりできないのだろう?この教室の子ども達(年中・年長)は、ふざけている子が多すぎると思う。

《2013 前期》

- ・とても楽しかったため、また参加したいです。ありがとうございました。
- ・とてもいい経験ができました。ありがとうございました。
- ・とても楽しかったです。ぜひ後期も。
- ・子どもがすごく楽しんでいて、毎回朝から「まだか、まだか」と待ちこがれていました。
- ・美浜町にこのような教室を開いてくれたことに感謝し

ます。

- ・毎回楽しくできているようで、満足げに帰宅しています。
- ・のびのびしてよかったです。
- ・いろいろな種目を用意して下さったので、飽きることなく子どもも楽しめたようです。一つのことを大人数でやるよりも子ども自身の個性を見ながら少人数単位でやるプログラムがとてもよかったです。次回また参加させていただきたいと思います。

． 考察

1. 学生の成長

保護者のアンケート結果より、2012年度前期における教室開催では、学生の参加を好ましく捉えつつも、指導に対する不安が多かったことが推察された。実際に、保護者が見ているという緊張や不安からであろうか、「子どもに遠慮してしまう」「子どもを叱れない」といった状況が多々あった。理由について多くの学生が「親以外に怒られたり、注意された経験がないから」と自己分析をした。学生とのディスカッションの結果、「単に優しく接することは子どもにとって必ずしも良いことではない」「子どもが危険なことをするなど間違った行動をした場合、毅然とした態度で正しく叱る」ことが2012年度前期の総括であった。この結果2012年度前期に散見された「もっと怒ってほしい」「けじめをつけてほしい」というニュアンスの自由記述が、2013年度にはほとんど見られなくなった。安全面に関する質問でも評価は高くなった。この「気づき」による指導力の向上は、学生自身が経験し分析した結果である。このことから、



写真1 2012年後期 指導風景



写真2 2013年後期 指導風景

学生は本実践から多くの経験値や学びを得ることができていると推察される。

2. 学生スタッフの育成と指導

学生がMSCに参画していくことは、地域住民にとってスポーツ指導環境や人材の提供を得ることになる。学生は指導体験からコミュニケーション力や運動指導に関するスキルを得ることができる。こうした好循環を生み出すには、学生がボランティアに真剣に取り組む姿勢と、成果を導くマネジメントが必要である。それには、高い意識や指導力を持つ学生スタッフの育成が不可欠である。本学には学内外のボランティア活動によって、集団・個人双方で社会貢献を行なっている者が多く、地域で活躍できるスタッフへの成長が期待できる。しかし本実践当初は「ボランティアは慈善活動である。賃金も発生しないので責任は生じない」と考える学生の存在が散見された。ボランティア活動に対する意識や、そこから得られる学びは、活動に漫然と参加しているだけでは得られない。ここでも指導やマネジメントの必要性を感じた。

現在学生に対する働きかけは「指導スタッフ」「補助スタッフリーダー」「補助スタッフ」の段階ごとに行なっている。「指導スタッフ」に対しては、指導案の立案と振り返り学習を教員が行なっている。また、本報告時の指導スタッフは、保育士になることを目標としている学生であった。実習経験もあるため、補助スタッフリーダーや補助スタッフに対する働きかけにも協力させた。指導スタッフとのディスカッションでは、指導する側に立つことで子どもへの対応に対する理解を深めることができたようである。「補助スタッフリーダー」は教員と指導

スタッフ双方から指導と振り返りを行なっている。指導案の作成まではできなかったが、補助スタッフの指導を行なうことで、責任感を持つことができたと推察される。「補助スタッフ」は、将来保育士になりたい学生が多かった。子どもへの対応方法を中心に、ボランティアの楽しさや責任感を知ってもらうことを優先させた。このため、教員からの指導は事前に配布した心得を中心とし、あまり多くの課題を与えないよう留意した。指導は学生を中心に前後のミーティングを行なった。アンケートからは難しさを知ると同時に、楽しさを感じ、ボランティアに対する責任意識を持つことができたと推察される。2013年後期から効果的に事前指導の理解度を高めるために映像を使った教材の作成を進めている。映像等を用いることで学習の充実を図りたい。

学生には入学・卒業等での入れ替わりという課題や、それぞれの生活環境などの問題も多い。実際にプレ事業から教室に携わっている学生の何名かは卒業を迎える4回生である。あとを引き継げるだけの意識やスキルを持った学生はまだおらず、学生スタッフの育成は急務である。

長期にわたり継続可能なクラブは極めて少ないと言われている(竹田, 2009)。理由の一つに人材の確保があげられるであろう。学生の入替わりに、クラブがいかうまく対応し、長期的な取り組み(プログラムの継続・展開)を実行できるかが今後重要となる。

まとめと今後の課題

アンケートより、ちびっこアジリティ教室の開催は地域住民に友好的に受け入れられていることが示唆された。しかし、子どもが運動できる場の提供だけでは不十分である。本実践にアジリティを選択した理由の一つに、地域の未就学児童の運動能力を高めるという目的がある。本実践では、子どもの運動能力を判定する基準として「MKS 幼児運動能力検査」を取り入れ、運動能力検査を実施している(幼児運動能力研究会)。参加児童が変わるため経年での変化を見ることは難しいが、地域の子どもの運動能力を見る判断基準として活用し、検証、報告を行ないたい。

本稿では「ちびっこアジリティ教室」の実践から得られた知見の報告とともに、学生がボランティアとして地域の活動に参加する意義と得られる学びについて考察を行なった。現在、大学と地域(行政組織、あるいは地域住民)が協働で運営している総合型地域スポーツクラブ

は、筆者が知りうる限り 25 例あり (2012 年 9 月時点)、各クラブ独自の運営を行なっている (文部科学省, 2012)。その中でも、学生が総合型地域スポーツクラブに参画する実践報告はまだ少ない (高橋ら, 2010)。今後の運営から得られる知見を蓄積し、さらに他のクラブと積極的に情報交換をすることで、プログラムの質や学生の学びの向上を図り、MSC の安定的な運営や発展に寄与したい。

引用文献

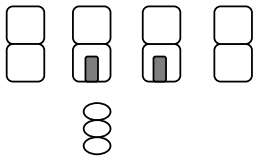

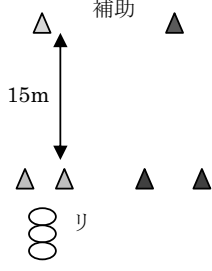
- 愛知県スポーツ振興審議会 (2011) : 平成 23 年度愛知県スポーツ振興審議会会議資料
- 公益社団法人 スポーツ健康産業団体連合会 (2008) : スポーツ産業による子どものスポーツ人口拡大に関する調査報告 社団法人 スポーツ健康産業団体連合会報告書, pp 28
- 財団法人 日本体育協会 (2008) : 総合型クラブ創設ガイド 財団法人 日本体育協会
- 杉原隆編著 (2001) : 幼児の体育 健帛社, pp 28-29
- 高橋仁美・来田宣幸・坂井智明・竹田正樹 (2010) : 地域と大学が連携した総合型地域スポーツクラブとしてのチャレンジング教室の取り組み 同志社大学スポーツ健康科学創刊号 (1), pp 79-91
- 高村秀史・松井健・伊藤僚 (2012) : 地域と連携した総合型
- 竹田正樹 (2009) : 「京たなべ・同志社スポーツクラブ」を例とした大学と地域連携による総合型地域スポーツクラブの提案 同志社大学スポーツ健康科学創刊号 (1), pp 61-70
- 地域スポーツクラブにおける学生参加型プログラム構築の取り組み - みはまスポーツクラブを例として - 日本福祉大学全学教育センター紀要 第1号, pp 123-136
- 中野昭一 (2001) : 図説・運動・スポーツの功と罪 - 運動生理・スポーツ医学・栄養 医歯薬出版株式会社 pp 20-21
- 日本福祉大学スポーツ教育センター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係 (2010) : 平成 21 年度美浜町民及び児童・生徒の運動・スポーツに関する実態調査 日本福祉大学スポーツ教育センター・美浜町教育委員会社会教育課社会体育係
- 日本福祉大学スポーツ教育センター HP : <http://www.n-fu.kushi.ac.jp/sports/index.html> (2013. 8. 20)
- 久湊尚子・尾崎秀男 (1996) : 体育の多種目的カリキュラムにおける有効性 高岡短期大学紀要 (7), pp 49-58
- 文部科学省 (2006) : スポーツ振興基本計画 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm (2013. 8. 20)
- 文部科学省 (2011) : スポーツ基本法リーフレット http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/08/24/1310250_01.pdf (2013. 8. 20)
- 文部科学省スポーツ・青少年局スポーツ・青少年企画課 3章, 11節, pp 6
- 文部科学省 (2012) : 平成 24 年度総合型地域スポーツクラブ育成状況 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/1325025.htm (2013. 8. 20)

- 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会 (2012) : 幼児期運動指針ガイドブック 文部科学省幼児期運動指針策定委員会 1章, 3節, pp 13-16
- 吉田伊津美・杉原隆・近藤充夫・森司朗 (2002) : 幼児の運動能力の年次推移 体育の科学 Vol. 52 No.1 pp 33
- 幼児運動能力研究会 : MKS 幼児運動能力検査 <http://youji-undou.nifs-k.ac.jp/index.html> (2013. 8. 25)

資料1 同一学生が作成したちびっこアジリティ教室の種目 (2012年度後期)

ちびっこアジリティ教室 第4回		
日時：7月10日(水)18:30~19:30		
参加者：高村		
指導スタッフ：		
補助スタッフ：		
TL	内容	備考
17:45	設営スタッフ集合	
18:15	スタッフ集合	
18:30	集合 整列 あいさつ ウォーミングアップ：()	けじめをつける！
18:40	種目開始 「走る」 15m ジョグ スキップ. かにさん. 後ろ向き 10m 変形スタート おやますわり. あおむけ. うつぶせ 25m ダッシュ！ おにごっこ 「跳ぶ」 跳び箱ジャンプ グーパージャンプ 補助つき片足ジャンプ 「投げる・捕る」 タオルつかまえ 下 によるによる タオル投げ ボール投げ 左 右 「回転する」 横向きごろごろ 前転 後転 組み合わせ 予備種目「判断して動く」 ラダー ドナルド. スラローム. 片足ケンケン	種目間に必ず給水！
19:25	集合 クールダウン ()	
19:30	あいさつ	
気づき		

資料2 同一学生が作成したちびっこアジリティ教室の種目 (2013年度前期)

教室名：ちびっこアジリティ教室 第1回			
期日：2013年5月15日(水)	時間：18:30~19:30	場所：美浜町総合公園体育館	
指導：高村 学生ボランティア：6名			
対象者：未就学児童(年中, 年長)			
指導目標：敏捷性を高める基本的な動きを楽しみながら体験させる			
時間	指導内容	指導者の動き	備考
18:30	集合・あいさつ ランニング2周 準備体操	①子どもを整列させる(色ごと) ①4隅に1人ずつ立ち, 外側を走らせる	受付でビブス配布
18:40	「回転, ジャンプ」 跳び箱ジャンプ(赤青, 黄緑) 走って跳び箱ジャンプ 横向きゴロゴロ(色別4か所) 前転 後転 組み合わせ	①マットの準備2枚×4か所 ②跳び箱準備1段と2段 ①跳び箱を片づける. ②マットに色別 ※マットを折って後転しやすくする	
18:55	給水	①マット, 跳び箱の片づけ	
19:00	「ジャンプ」 グーパージャンプ 立ってジャンプ ジャンプ回転(できれば)	①色ごとで集合(高村を中心に4か所) ※座って足を開閉し, ジャンプさせる (できれば手を持ってあげる) ※向かい合って両手を持つ ※足を持ち上げその上をジャンプさせる	高 保護者の参加を促す
19:10	給水 「走る」 スキップ, かにさん, うしろ 走り, あひる, キャリオカ いろんなスタート 鬼ごっこ	①スタート位置2個ずつと約15mの位置 に1個ずつカラーコーンを置く ②各色のスタート位置に子どもをわける ①スタート位置 各色4か所 4名 ②折り返し(15m)2名 各色のコーン ※鬼の色を指定, 他の色の子どもは逃げる 1分×4回	補助 15m 
19:25	集合 整理体操 あいさつ・解散	①前に整列	